

ライフ・コースは多様化しているか？： 最適マッチング法によるライフ・コース分析

福田 亘孝

(国立社会保障・人口問題研究所)

Social Changes and Women's Life Courses: Diversification or Standardization?

FUKUDA Nobutaka

高学歴化や家庭外就業の増大は女性のライフ・コースを多様化すると考えられている。本稿ではNFRJ03のデータに最適マッチング法を用いて女性のライフ・コースの変動について分析をおこなった。本稿の分析結果によれば、第一に、1960年代以降の出生 cohorts から非標準型のライフ・コースを取る女性が増え、ライフ・コースの多様化が進んでいた。第二に、大卒女性はそれ以外の学歴の女性と比べて多様なライフ・コースを選択する傾向があることが見られた。第三に、専門職や管理職に従事している女性はそれ以外の職業に従事している女性よりもライフ・コースが多様化していた。しかし、出産や育児による就業の中断はライフ・コースの多様化を抑制する効果を持っていた。こうした結果をふまえると、ライフ・コースの多様化は高学歴で専門職に従事しているような経済的自立性の高い女性で進展しており、個人の社会経済的属性によって多様化の程度に差があると言える。

キーワード：ライフ・コース、多様化、標準化

1. はじめに

日本の家族社会学研究において、家族の多様化はこれまで様々に論じられてきている。例えば、野々山（1989；1996）は高度成長期以後、日本社会では個人がどのような時期に、誰と結婚し、何人の子どもを持ち、どのような居住形態を取るかというライフ・スタイルの選択可能性が高まり、家族の多様化が進んでいると論じている。そして、ペーパーレス結婚や同棲カップルや生涯シングルやDINKSといった形態の家族の出現を多様化の例としてあげている。同様に、目黒（1990）も現代家族では、家族生活が人生の様々な時期に様々な形で営まれ、個人によって選択されるライフ・スタイルとなり、家族が多様化していると述べている。

こうした家族の多様化は、別の視点から見ると、個人の役割移行が複雑になることであり、親役割や妻役割や夫役割への移行の有無やタイミングが多様化していることを意味している。Janet Giele と Glen Elder（1998）によれば、ライフ・コースとは個人が人生において経験する出来事や役割移行の経歴のことである。従って、家族の多様化は個人のライフ・コースが多様化していると考えられることができる。

上述したように、家族社会学において家族の多様化は繰り返し主張されてはいるが、実際にライフ・コースの視点から見て、家族がどの程度、多様化しているかについては、これまで十分な分析は行われてきていない。しかし、家族社会学において、家族の変動は主要な研究テーマの一つであ

り、家族におけるライフ・コースが実際にどの程度、多様化しているのかを吟味することは日本の家族の変動を考える上でも重要な視点であると言えよう。本稿では結婚と出産というライフ・イベントに注目し、女性のライフ・コースの多様化について検討を行う。以下においては、まず、マクロな社会の変動とライフ・コースの変化の関連について考察する。続いて、本分析で用いる分析手法とデータについて説明を行う。そして最後に、分析の結果を提示しながら女性のライフ・コースの多様化の特徴とその規定要因について検討する。

2. ライフ・コースの多様化と標準化

日本において女性のライフ・コースが多様化する要因としては3つの点を考えることができる。まず第一の要因として、高学歴化の進展である。戦後、女性の高校や大学への進学率は着実に増加してきたが、特に、短大や大学などの高等教育機関への進学率は1970年前後からの増加が顕著である。例えば、女性の短大・大学への進学率は1970年には18%であったのが2004年には49%へと2.8倍になっている。一方、同じ時期に男性の進学率は29%から51%へと1.8倍の増加であり、女性の進学率は男性を上回るペースで上昇したことが分かる(文部科学省, 2005)。そして、こうした学歴水準の上昇は、労働市場における女性の賃金稼働力を上昇させることになる。実際、学歴による所定内給与を見てみると、30-34歳の大卒女性では月額291,400円あるのに対して、同年齢の高卒女性では206,400円であり、前者は後者の1.4倍になっている(厚生労働省, 2003)。従って、高学歴化は女性の賃金稼働力を着実に高めている。

第二の要因としては、女性の雇用機会の拡大が挙げられる。特に、サービス産業を中心に家庭外で就業する女性が過去数十年で着実に増大している。実際、25歳から49歳までの女性の労働力人口比率は、1970年には53.2%であったのが2000年には66.1%にまで上昇している(総務省, 2003)。従って、労働力参加のM字型パターンは依然として残ってはいるものの、M字の底の部分は以前と比べるとかなり上がってきており、就業する女性の割合は上昇傾向にある。さらに、女性就業者の従業上の地位別割合を見ると、1970年には雇用者の割合が54.7%に過ぎなかったが、2000年には雇用者が81.4%にまで上昇しており、自営業や家族従業者としてではなく家庭外で被雇用者として就業する女性が増加している。

こうした高学歴化による賃金稼働力の上昇や家庭外での就業機会の増大は、女性のライフ・コースに二つの影響をもたらすと考えられる。すなわち、第一に高学歴化や就業機会の拡大は女性の経済的自立性を高め、親や夫への経済的依存性を低めることになる。こうした変化は女性に妻役割や母役割の遂行者に移行する以外に、経済的に独立した就業者にとどまる選択肢をも与えることになる。そして、これは妻役割や母役割への移行を複雑化させ、ライフ・コースを多様化させるはずである。第二に女性が家庭外で就業することによって、伝統的な性別役割分業関係の維持が困難になり、就業役割と家族役割の調整を必要にさせる。そして、就業役割と家族役割の調整の必要性は、それぞれの個人や家族に適した就業パターンや役割分業のあり方を模索させることになる(野々山, 1999)。この結果、結婚や出産というライフ・コースは定型化されたものから女性が複数の選択肢の中から自分に適した型を選ぶものになり、ライフ・コースの多様化が生じる。このような点を考慮すると、学歴が高く所得の高い職業に就いている女性ほど、多様なライフ・コースを選択すると考えられる。

社会経済的要因に加え、ライフ・コースの多様化を進める第三の要因として意識構造の変化が考えられる。周知のとおり、戦後日本は急速な経済成長を経験し、豊かな社会を実現させるにいたっ

た。さらに、社会政策や経済政策を通じて福祉国家の構築を進め、社会経済的なリスクも軽減した。こうした豊かで安定した社会の成立は、急速ではないが着実に人々の意識をより非伝統的で個人主義的な方向へと変化させ (Beck and Beck-Gernsheim, 2002; Beck et al., 1994)、人々は以前とは異なった動機に基づいて行動するようになる。すなわち、社会の安定度が低く、リスクが高い段階では集団の伝統的価値や規範の拘束力が強い。しかし、社会の安定が増し、リスクが低減するにつれて、こうした価値や規範の統制力が弱くなり、個人の選択の自由が拡大する。この結果、伝統的価値や規範よりも個人の嗜好が行動の決定において重視され、人々の行動は個人主義的傾向が強まる。

ライフ・コースの多様化はこうした意識構造の変化によっても促進される可能性がある。すなわち、家族に関する伝統的価値や規範が弱まるにつれて、結婚する、あるいは、子どもを持つという行為が社会の慣習や規範として当然のもの、当たり前の行為ではなく、自己の選好や人生観に基づいて個人が選択する行為と見なされるようになる。そして、もし自分の価値観や選好に合わないならば、結婚しなかったり、子どもを持たずに生涯を過ごすようなライフ・コースが選択されたりするようになる。実際、人々の意識には非伝統的で個人主義的な傾向が見られる。例えば、「必ずしも結婚する必要はない」という意見を支持した人の割合は1993年には51%であったが、2003年には59%に増加している。対照的に、「人は結婚するのが当たり前だ」という意見を支持した人の割合は45%から36%に減少している (NHK 放送文化研究所, 2005)。さらに、男性と女性を比べると女性の方で結婚する必要ないと考える人の割合が多くなっている。こうした変化は女性の間で伝統的な結婚規範の拘束力が次第に弱くなり、「結婚するかしないか」というライフ・イベントの選択が個人の選好にゆだねられるようになってきていることを示唆している。従って、女性の意識構造が非伝統的で個人志向的な色彩を強めるにつれて、ライフ・コースは選択的になり多様化すると考えられる。

しかし、高学歴化の進展や家庭外就業の拡大によってライフ・コースは必ずしも多様になるとは限らない。むしろ、こうした変化はライフ・コースを標準化させる可能性もありうる (Buchmann 1989; Modell et al., 1976; Smelser and Halpern, 1978)。すなわち、学校制度や企業による生産システムの発達は、かつて家族が担っていた教育機能や生産機能が家族の外部の専門機関に構造分化していく過程である。従って、高学歴化によって多くの女性が長期間就学したり、就業機会の拡大によって家庭外で働く女性が増えることは、個人が人生において家族外部の専門機関に依存する度合いが大きくなることを意味している。そして、こうした専門機関は年齢階梯的に合理的に組織化されており、一つの役割から別の役割への移行が個人の年齢によって規定される特徴がある。例えば、学校制度においては入学や卒業は年齢によって定められており、ある年齢に達すると入学によって学生役割へ移行し、別の年齢に達すると卒業によって学生役割から移行する。同様に、企業においても、日本的年功序列型の昇進システムでは、年齢によって役割の移行が生じる傾向が強い。この様な特徴に着目するならば、高学歴化の進展や家庭外就業の機会の拡大はより多くの女性をより長期にわたって年齢階梯的に組織された制度に関与させ、役割の移行を年齢に強く規定された標準的なパターンにする可能性があり得る。実際、女性の学業終了年齢の四分位範囲は1914-18年の出生コーホートより1954-58年のコーホートで小さくなっており (正岡・藤見・嶋崎, 1999)、ライフ・コースはむしろ標準化しているのが見て取れる。そして、学校や企業などの家族外部のシステムにおいて役割の移行が標準化されることによって、当然、結婚や親なりといった家族システムにおける役割移行も影響を受け、ライフ・コースが標準化することが考えられる。

これに加え、福祉制度の発達によってもライフ・コースの標準化が進む可能性がありうる (Mayer

and Schoepflin, 1989)。すなわち、福祉国家の発展は、法律による権利や義務の規定を通じて、あるいは、社会保障や社会サービスの給付を通じて、個人の生活に対する国家の干渉を強めてきている。例えば、老齢年金の給付時期や給付額は退職の時期や退職後の生活のあり方を左右するであろうし、また、育児休業制度や保育サービスの拡充は子どもを持つ、持たないといった家族形成のパターンに影響を及ぼすであろう。そして、現代の福祉国家が提供する福祉制度は一定の要件を満たす個人に対しては区別なく、ユニバーサルに制度が適応される形式になっている。こうした福祉サービスの給付は、社会的資源の利用可能性を平準化することで、人々が人生において経験する可能性がある社会的リスクを低減させ、人生経験の均一化を促進することになる (Beck, 1986)。例えば、医療保険制度の発達には疾病リスクを低下させ、病気による就学や就業の中断を経験する人を減少させるであろう。従って、福祉国家の発達による社会的リスクの低下は、人々の役割移行にはバリエーションを少なくさせ、ライフ・コースを標準化させる可能性がある。

これまで論じてきた点を考慮すると、高学歴化や就業機会の増大や意識構造の変化の帰結として、現代社会において女性の結婚や親なりといった役割の移行が複雑になり、ライフ・コースが「多様化」する可能性は十分あり得る。しかし同時に、現代の社会経済構造は女性のライフ・コースを「標準化」させる作用をも持っている。従って、女性のライフ・コースが実際に多様化しているのかどうか、そして、仮に多様化しているとしたら、どの層で多様になっているのかについては、データを用いて検討する必要があると言えよう。

3. データと分析方法

本稿の分析では NFRJ03 の女性サンプルのうち、調査時点での年齢が 35 歳以上 60 歳未満の女性を用いる。家族経歴において配偶者との死別や離別や再婚の経験は個人にとって重要な役割移行であり、ライフ・コースの多様化を分析する場合にも、こうしたイベントの発生パターンを考慮する必要がある。しかし、NFRJ03 では、残念なことに死別や離別や再婚の経験回数と経験時期についての情報を得ることができない。従って、本稿では分析対象を配偶者との死別、離別、再婚を経験したことのない女性に限定した。こうして選ばれた分析対象者は 1943 年から 1969 年までに生まれた女性 1,638 サンプルで、敗戦からオイルショック以前までの出生コーホートをほぼカバーしている。

本分析では Andrew Abbott によって社会学で用いられるようになった最適マッチング (Optimal Matching) 法 (Abbott and Tsay, 2000) を用いた分析を行う。この手法は生物学の分野で 1970 年代から遺伝子の塩基配列の相異を分析するために発展し、1980 年代後半に Abbott たちを中心にして社会科学研究に積極的に応用されるようになった手法である (Abbott, 1983 ; 1995)。特に、社会学の分野では職歴研究への応用が目立っており、代表的なものとしては、イギリスとアイルランドの階層移動 (Halpin and Chan, 1998)、イギリスのロイズ銀行の昇進システム (Stovel et al., 1996)、18 世紀ドイツの音楽家の職歴 (Abbott and Hrycak, 1990)、女性の金融専門職のキャリア・パターン (Blair-Loy, 1999)、職業経歴と退職の関係 (Han and Moen, 1999) についての研究などが挙げられる。さらに職歴研究以外では、福祉国家の発達過程の国際比較分析 (Abbott and DeViney, 1992) やアメリカにおける地理的移動の分析 (Stovel and Bolan, 2004) といった研究にも用いられている。また、日本においては渡邊 (2004) が SSM 調査のデータに最適マッチング法を使い職歴パターンの分析を試みている。

ライフ・コースの研究では、これまでイベント・ヒストリー分析を使った結婚や出産や離家の研

究はいくつも行われている。イベント・ヒストリー分析は時間の経過にともなって発生するライフ・イベントの生起確率をセンサーされた対象も含めて柔軟に分析できるという長所を持っている。しかし、イベント・ヒストリー分析では分析対象となる被説明変数は結婚や出産といった個々のイベントであり、局所的な単一のイベント経験のタイミングの分析には適しているが、複数のイベントの発生の連鎖を全体として分析するには適していない。これに対して、最適マッチング法は、イベント・ヒストリー分析のようにイベント発生メカニズムを確率的に検証したり、センサーされた個体を含むサンプルを処理するには適した方法ではない (Abbott, 2000; Wu, 2000)。しかし、複数のイベントの時間に沿った配列の類似性を全体として比較するには適した方法である。すなわち、ある時点から別の時点までの個人のライフ・コースの軌跡 (trajectory) と別の個人のライフ・コースの軌跡がどの程度異なっているのか、さらに、その差異はコーホートや個人の属性と関連があるかを分析する場合には有効な方法である。ライフ・コース研究では役割移行の「タイミング」と「配列 (trajectory)」に注目して分析を行う。従って、最適マッチング法は後者の役割移行の配列を分析するのに適した手法と言える。

配列を分析する際、最適マッチング法では配列の間の距離を求め、この距離の大小を配列間の異質性の尺度と見なす。具体的には、二つの配列があるとすると両者の距離は、一方の配列を他方の配列に一致させるために必要とされる変換によって測定される。この変換は、置換 (substitution)、削除 (deletion)、挿入 (insertion) の三つの操作によって行われ、それぞれの操作にはコストがかかるを考える。そして、一方の配列を他方の配列に一致させるのに必要な最小のコストをこれら二つの配列の距離と見なす。例を挙げて説明すると、仮にAとBという二人の人がいて独身 (S) から結婚 (M) までの21歳から26歳までの一歳ごとのライフ・コースの変化が以下のようなものであったとする。

A : S S S M M M
 B : S S M M M M

ここでAは24歳で結婚し、独身から既婚への移行を経験しており、Bは23歳で同様の移行を経験している。この両者の配列を一致させるには、例えば、次のような変換を行うことによって可能になる。

A : S S S M M M
 B : ↑ S S M M M M
 S ↓

この変換ではBの先頭にSを挿入し、末尾のMを削除することでAとBの配列は一致する。しかし、これ以外にも両者の配列を一致させる変換は存在し、例えば、

A : S S S M M M
 B : S S(S)M M M

上記のようにBの三番目のMをSに置換することによっても両者の配列は同一になる。この様に、

二つの配列を一致させる変換の仕方は一つではなく、最適マッチング法では複数ある変換の仕方の中で最もコストの小さい変換の仕方を両者の配列の距離として採用する。

上述した最適マッチング法を、本稿の分析では以下の手続きでNFRJ03のデータに応用し配列間の距離を算出した。まず、分析対象となるサンプルから平均的なライフ・コースを求めた。すなわち、分析サンプルの子ども数の分布を見ると52%が二人であり、過半数の人が子どもを二人持っていた。そして、婚姻年齢、第一子出産年齢、第二子出産年齢のメディアンはそれぞれ、24歳9ヶ月、26歳3ヶ月、28歳9ヶ月であった。こうした結果をもとに24歳9ヶ月で結婚し、26歳3ヶ月で最初の子どもを持ち、28歳9ヶ月で二番目の子どもを持つという家族経歴を女性の平均的な基準ライフ・コースとした。次に、ライフ・コースにおいて経験される家族経歴の状態を「独身」「既婚で無子」「既婚で子ども一人」「既婚で子ども二人」「未婚で子ども一人」「未婚で子ども二人」の6つとして、15歳から35歳までの間の各個体の家族経歴の状態を1ヶ月単位で測定した。最後に、最適マッチング法を用いて、基準ライフ・コースの家族経歴の配列と各個体の家族経歴の配列の距離を算出し、これを各個体のライフ・コースの非標準度の値とした。この操作では、置換コストを0.6、削除コストと挿入コストを1.0として計算した。こうして求められた基準ライフ・コースと各個体との距離の値は、個人のライフ・コースが平均的なライフ・コースに近いほど0になり、平均的なライフ・コースから離れるほど値が大きくなる。本分析では、距離の値が分析対象全体の「平均値+標準偏差/2」より大きい値を取る個体を非標準型なライフ・コースを取った個体、この値より小さい値を取る個体を標準型なライフ・コースを取った個体と考え、前者の個体の割合が多いほどライフ・コースが多様化していると見なした。

4. 分析結果

表1は出生コーホートごとに標準型ライフ・コースと非標準型ライフ・コースの割合を示したものである。まず、非標準型と標準型の比率をコーホートごとに見ると、若いコーホートほど非標準型のライフ・コースの割合が上昇しており、ライフ・コースの多様化が進んでいる傾向が見られる。特に、非標準型のライフ・コースの割合は1960年代以降の出生コーホートで顕著に大きくなっている。具体的には、非標準型の割合は、敗戦直後の1945-1949年コーホートから1955-59年コーホートまでは37%から42%へとわずか5%しか上昇していない。しかし、この型の割合は1960-64年コーホートになると53%になり、1955-59年コーホートから10%以上も増大している。

出生コーホート	ライフ・コースのパターン (%)	
	標準型	非標準型
1940-44年	75.0	25.0
1945-49年	63.0	37.0
1950-54年	62.8	37.2
1955-59年	58.5	41.5
1960-64年	47.3	52.8
1965-69年	45.3	54.7
合計	57.5	42.5
N	942	696

こうした非標準型のライフ・コースの割合の変化は、結婚年齢の上昇に伴って、その後の第一子出産や第二子出産のライフ・イベントのタイミングが全体として後方にシフトしたために、基準ライフ・コースと各個体との距離が増大したことに起因する可能性がある。この点を検討するために、表2は結婚年齢と第一子出産年齢の平均値と四分位範囲をコーホートごとに比べたものである。

出生コーホート	結婚年齢		第一子出産年齢	
	平均	四分位範囲	平均	四分位範囲
1940-44年	24.8	2.9	25.6	3.2
1945-49年	25.3	3.5	26.3	4.1
1950-54年	25.3	3.6	26.4	4.1
1955-59年	25.8	4.3	27.1	4.3
1960-64年	26.6	4.5	28.0	4.7
1965-69年	26.2	4.4	27.7	4.6

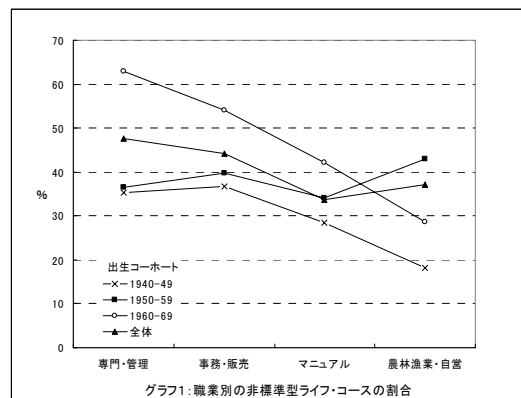
予想どおり、結婚年齢の平均値はコーホートが若くなるほど高くなっている。しかし同時に、四分位範囲の値もコーホートが若くなるほど大きくなる傾向が見られる。例えば、1945-49年コーホートの四分位範囲は3.5歳であるのが1965-69年コーホートでは4.4歳にまで上昇している。同様に、第一子出産年齢についても平均値は若いコーホートほど高くなっている。しかし同時に、四分位範囲の値も若いコーホートで若干、大きくなっている。こうした結果を見る限り、コーホートが若くなるにつれて、結婚年齢が上昇するとともに、結婚年齢のちらばりの程度も増大しており、非標準型のライフ・コースの割合の変化のすべてが結婚年齢の変化に起因するとは言い切れない。従って、若い出生コーホートほどライフ・コースが多様化する傾向があると言えよう。

次に、就業経験との関係について見てみよう。表3は標準型ライフ・コースと非標準型ライフ・コースの割合を「就業経験なし」「就業経験あり（現在、非就業）」「就業経験あり（現在、就業中あるいは休職中）」の三つのグループで比較したものである。一見して分かるように、「就業経験なし」のグループでは非標準型の割合は35%、標準型の割合は65%であり、後者の比率がかなり高くなっている。他方、「就業経験あり」の二つのグループでは非標準型の割合は40%を上回っており、就業経験の有る女性ほど多様なライフ・コースを取る傾向がある。さらに、就業経験とライフ・コースの関係をコーホートごとに見ると、就業経験のある女性で非標準型を取る人の割合は若いコーホートほど高くなり、1940年代と1950年代の出生コーホートでは就業経験女性の3-4割が非標準型であるに過ぎないが、1960年代コーホートでは5割近くが非標準型になっている。

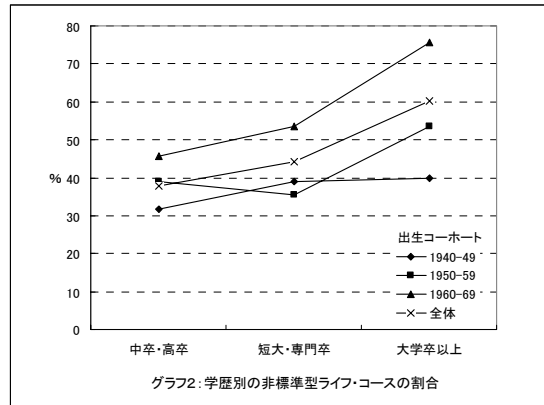
就業経験	ライフ・コースのパターン (%)	
	標準型	非標準型
就業経験あり(現在、就業中 あるいは休職中)	59.3	40.7
就業経験あり(現在、非就業)	52.3	47.7
就業経験なし	65.0	35.0
N	942	694

では、ライフ・コースの多様化の程度は職業によって異なっているのだろうか？ グラフ1は「就業経験あり（現在、非就業）」と「就業経験あり（現在、就業中あるいは休職中）」の二つのタイプの女性について、非標準型ライフ・コースの割合を職業ごとに示したものである。職業は「専門・管理」「事務・販売・サービス」「マニュアル（＝技能・労務・作業）」「農林漁業・自営業・家族従業」の4つの分類をここでは用いている。

まずコーホート全体で見てみると、非標準型のライフ・コースの割合は専門・管理職層で最も高く48%に達している。反対に、マニュアル層で最も低く34%に過ぎない。さらに、非標準型の割合の職業間の格差は1940年代コーホートや1950年代コーホートよりも1960年代出生コーホートで大きくなる傾向が見られる。実際、専門・管理職層とマニュアル層との非標準型の割合の差は1940年代出生コーホートでは7%に過ぎないが、1960年代出生コーホートでは20%にも達している。後者の出生コーホートは女性の家庭外就業が拡大しつつあった1980年代に学校を卒業し、労働市場に参入した人々である。しかし、就業を経験する女性の増大は彼女たちのライフ・コースを同じ程度に変化させたわけでない。グラフ1を見る限り、女性就労の拡大は、より多様化したライフ・コースを経る職業とあまり多様化しないライフ・コースを経る職業との分化を生じさせる過程でもあった。すなわち、専門・管理職層の女性では非標準型のライフ・コースを選択する可能性が高い一方で、マニュアル職層の女性ではそういったライフ・コースを選択する可能性は低い。要するに、女性就業の拡大は必ずしもライフ・コースの多様化をあらゆる職業で均一にもたらすわけでないと言える。むしろ、グラフ1の結果は、非標準型のライフ・コースを選択するには、どの職業に従事するかが重要な要素であることを示している。

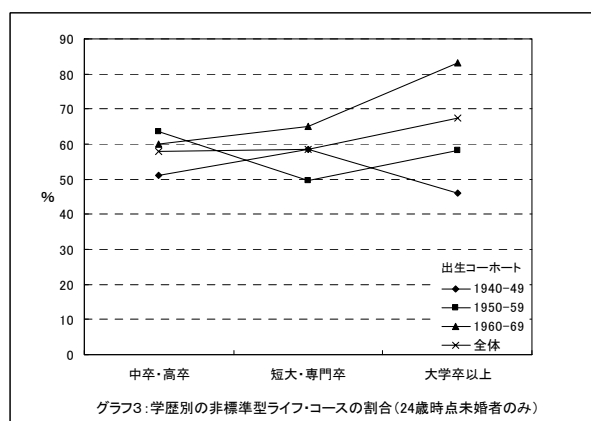


続いて、学歴とライフ・コースの関係をグラフ2で見ると、学歴が高くなるほど非標準型のライフ・コースを取る女性の割合が多くなる傾向がある。すなわち、コーホート全体では、中卒・高卒の女性の38%が非標準型であるに対して、大卒以上ではこの割合が60%にまで上昇している。さらに、こうした学歴間の格差は出生コーホートが若くなるほど拡大する傾向が見られる。例えば、中卒・高卒の女性と大卒以上の非標準型の割合の差は、1940年代コーホートではわずか8%に過ぎないが、1960年代出生コーホートになるとこの差は30%にまで拡大している。



しかし、ここで注意しなければならないのは、日本のように学生結婚の少ない社会では、学歴が高いと婚姻年齢が高くなり、学歴が低いと婚姻年齢が低くなる傾向が見られる。このため、高学歴者では基準コーホートとの距離が婚姻年齢の遅れを反映してより大きくなり、反対に、低学歴者では早婚によって基準コーホートとの距離が小さくなる可能性がある。仮に、グラフ2で見られた学歴間の差がこうした要因によるものだとするならば、大学卒層で見られた高い非標準型の割合は修学期間の長期化によるものであって、彼女たちの経済的自立性の高さとは関係なくなってしまう。この点を検討するためにグラフ3では24歳の時点で結婚していなかった女性のみ限定して学歴とライフ・コースの関係を見たものである。

このグラフにおいても、非標準型のライフ・コースの割合は、コーホート全体で見ると、大卒以上では68%、中卒・高卒では59%となっており、高学歴者層で大きくなっている。さらに、出生コーホートによる差を見ると、非標準型のライフ・コースの割合は若いコーホートで大きくなっており、1960年代出生コーホートでは中卒・高卒層と大卒以上層の差が23%にまで達している。従って、結婚年齢の影響をコントロールしても、高学歴者層では非標準型のライフ・コースを取る女性が多く、これは学歴の上昇による結婚タイミングの遅れだけでは説明され得ない。むしろ、この結果は経済的自立性の高い高学歴女性ほどライフ・コースが多様化していることを示唆している。



最後に、価値意識とライフ・コースの関係について吟味しよう。NFRJ03では問10の(ア)から(ケ)で家族やジェンダー関係についての価値意識を尋ねている。本稿では家族に関する(ア)、(エ)(オ)(カ)(キ)(ケ)の項目に対して「そう思う」と回答した場合に1、「どちらかといえばそう

思う」と回答した場合に2、「どちらかといえばそう思わない」と回答した場合に3、「そう思わない」と回答した場合に4を与え、クロンバッハの α 係数を計算すると0.73であり、項目の一貫性は良好な水準であった。それゆえ、これら6項目の合計を回答者ごとに求め、これを回答者の価値意識の得点とした。さらに、得点のレンジを三等分し、回答者を三つのグループに分けた。そして、得点の最も大きなグループを「非伝統的」カテゴリー、最も小さいグループを「伝統的」カテゴリー、両者の中間のグループを「中立的」カテゴリーとして、ライフ・コースとの関連を検討した。

ただし、ここで注意しなければならないのは、NFRJ03の価値意識は調査時点における回答者の意識を尋ねているので、本稿の分析では価値意識とライフ・コースの間で因果関係の確定は不可能である点である。換言するならば、本稿の分析では両変数の共変関係を見ているに過ぎない。つまり、

(1)「非伝統的」価値意識を持っているから非標準型のライフ・コースを選択したのか、(2)非標準型のライフ・コースを選択したために「非伝統的」価値意識を持つようになったのか、両者のいずれか一方に決定することはデータの性質上、不可能ということである。

価値意識	ライフ・コースのパターン (%)		N
	標準型	非標準型	
非伝統的	58.8	41.3	337
中立的	57.1	42.9	951
伝統的	58.6	41.4	319

この点をふまえた上で、表4を見てみると、非標準型のライフ・コースの割合は「伝統的」価値意識グループで41%、「中立的」グループで42%、「非伝統的」価値意識グループで41%であり三つのグループ間に殆ど差がない。この傾向は出生コーホートごとに見た場合でも、ほぼ同じ傾向を示しており、非標準型のライフ・コースの割合は価値意識の三つのグループで差が殆ど見られない。

家族や夫婦役割に対する意識構造は、過去数十年において大きく変化してきていることが指摘されているが、本稿の結果を見る限り、価値意識とライフ・コースの間には明確な関連が観察されず、人々の意識の変化がライフ・コースの多様化をもたらした形跡は見受けられない。

これまで述べてきたようにライフ・コースの多様化には学歴や職業などによって差が見られる。しかし、これらの要因がライフ・コースにどの程度、影響を及ぼしているのかは単変量や二変量による記述的分析では充分に知ることができない。そこで、以下においてはこうした変数がどの程度ライフ・コースの多様化に影響を与えているのかを検討するために、ロジスティック回帰分析を行う。以下のロジスティック回帰分析においては、個体が標準型のライフ・コースを取った場合には0、非標準型のライフ・コース取った場合には1とする二値変数を従属変数として、分析を行った。

最初に表5のモデル1は独立変数に出生コーホートと学歴を含めたものである。この結果を見ると、まず、若いコーホートほど非標準型のライフ・コースを取る確率が高くなっている。例えば、非標準型と標準型のオッズ比は1945-49年コーホートと比べて1960-64年コーホートでは1.75(= $e^{0.560}$)倍、1965-69年コーホートでは1.95(= $e^{0.667}$)倍になっており、1960年代以降の出生コーホートでライフ・コースが多様化している。他方、学歴については、中卒・高卒と短大・専門卒の間には回帰係数に有意な差は見られないが、大学卒の係数は有意であり、中卒・高卒と比べて2.19(= $e^{0.786}$)倍ほど非標準型のライフ・コースを経る確率が高くなっている。

しかし、既に述べたように、こうした学歴間の差は高学歴化に伴う婚姻年齢の上昇に伴うもので

ある可能性がある。そこで、モデル2では24歳時点での既婚を示すダミー変数を独立変数に入れて、結婚タイミングをコントロールして分析している。予想どおり、24歳時点で結婚している女性は未婚の女性と比べて非標準型のライフ・コースを取る確率が有意に低くなっている。従って、婚姻年齢の上昇は、基準ライフ・コースとの距離の増大に、ある程度、寄与している。しかし、学歴については依然として大卒カテゴリーで回帰係数が有意であり、非標準型を取る確率が高い。従って、結婚タイミングの影響をコントロールしても、大学卒業の学歴はライフ・コースを非標準型にする効果を持っている。この結果は、高学歴女性のライフ・コースの多様化が結婚タイミングの変動のみでなく、彼女たちの持つ高い賃金稼働力や良好な就業機会とも関係していることを示唆している。

表5のモデル3では、女性職業との関係を検討するために、独立変数に出生コーホートと職業を入れたものである。このモデルでは、現在仕事に就いている、あるいは、休職中の場合は現職を、また、過去、仕事に就いていた場合は元職のうち主要なものを職業とした。女性の職業の効果をしてみると、非標準型と標準型のオッズ比は「マニュアル」職と比べて「専門・管理」職では1.56(= $e^{0.443}$)倍、「事務・販売」職では1.44(= $e^{0.362}$)倍であり、非標準型を取る確率が高くなっている。恐らく、「専門・管理」職や「事務・販売」職は「マニュアル」職よりも所得水準が高いはずである。こうした経済的自立性の高さは、野々山(1999)が指摘するように夫への経済的依存性を低め、家族役割と就業役割の再調整を促進すると考えられる。このため、「専門・管理」職と「事務・販売」職の女性では「マニュアル」職の女性と比べて、多様なライフ・コースが見られたと考えられる。これに対して、「働いたことがない」と「農林漁業・自営業」と「マニュアル」職とには回帰係数に有意差は見られず、これら三つのカテゴリー間にライフ・コースの多様化について明確な差は存在しない。

女性がどのような職業に従事しているかという点に加え、女性職業とライフ・コースの関係を考える場合には、就業中断の有無をも考慮する必要がある。特に、出産や育児による退職経験の有無は女性のライフ・コースのパターンを左右する重要な要因であり、こうした退職を経験した女性は経験していない女性と比べて、標準的なライフ・コースを選択する可能性が高いと推測される。そこで、モデル4では出産・育児による退職経験のダミー変数をモデルに加えている。予想どおり、推定されたダミー変数の回帰係数は負であり、非標準型のライフ・コースを取る確率は出産や育児による退職を経験した女性で低くなっている。すなわち、出産や育児によって、一端、就業を中断するとライフ・コースの多様化は抑制されることになる。しかし、モデル4においても、「専門・管理」職と「事務・販売」職の回帰係数は依然として有意になっており、出産や育児による退職経験の影響をコントロールしても、これらの層の女性たちは非標準的なライフ・コースを取る傾向が見られる。

最後にモデル5で価値意識とライフ・コースの関係について検討しよう。回帰係数の値を見る限り、非標準型と標準型のオッズ比は「伝統的」意識グループと比べて、「中立的」意識グループでは1.05(= $e^{0.050}$)、「非伝統的」意識グループでは1.04(= $e^{0.039}$)になっており、非標準型を取る確率が高くなっている。しかし、いずれのカテゴリーの回帰係数も統計的には有意になっておらず、両変数の間に明確な共変関係は観察されない。従って、意識構造の変化とライフ・コースの変動とは関連はないと言える。

表5: ライフ・コースに関するロジスティック回帰分析

	モデル1 回帰係数	モデル2 回帰係数	モデル3 回帰係数	モデル4 回帰係数	モデル5 回帰係数
出生コーホート					
1940-44 (1945-49)	-0.56 **	-0.60 **	-0.56 **	-0.58 **	-0.53 **
1950-54	-0.03	-0.01	0.01	-0.06	-0.01
1955-59	0.14	0.02	0.16	0.19	0.18
1960-64	0.56 ***	0.32 **	0.60 ***	0.66 ***	0.62 ***
1965-	0.67 ***	0.45 **	0.66 ***	0.72 ***	0.72 ***
学歴					
(中学・高校)					
短大・専門	0.09	-0.15			
大学以上	0.79 ***	0.32 *			
24歳既婚ダミー		-2.20 ***			
職業					
専門・管理			0.44 **	0.41 **	
事務・販売 (マニュアル)			0.36 **	0.36 **	
農林漁・自営			0.21	0.29	
就業経験無し			0.17	---	
退職経験ダミー				-0.19 *	
価値意識					
非伝統的					0.04
中立的 (伝統的)					0.05
定数項	-0.61 ***	0.29 **	-0.83 ***	-0.75 ***	-0.57 ***
Log likelihood	-1073.21	-915.52	-1070.06	-980.42	-1069.38
サンプル数	1628	1628	1615	1480	1607

*** p<0.01; ** p<0.05; * p<0.10

()はレファレンス・カテゴリー

5. おわりに

日本において、高学歴化や家庭外就業の拡大によって女性の社会経済的地位は近年、大きく変化してきている。これに加え、家族に関する人々の意識も変容してきている。本稿では最適マッチング法を用いて、こうした社会変化と女性のライフ・コースの多様化についての分析を行った。

本稿の分析結果によると、第一に、コーホートが若くなるにつれて、非標準型のライフ・コースを取る女性の割合が増加する傾向が見られた。特に、1960年以降の出生コーホートで非標準型の割合が顕著に増加していた。この世代のコーホートは1980年代以降に結婚や親なりを経験した人であり、女性のライフ・コースはこの時期頃から多様化が進んだと考えられる。第二に、学歴の影響については、大学卒業以上の女性で非標準型のライフ・コースを取る女性が多くなる傾向が見られた。特に、非標準型の割合の学歴間格差は1960年代出生コーホートで高く、若い世代の高学歴女性でラ

ライフ・コースの多様化が進展していた。さらに、大卒女性は結婚タイミングの影響をコントロールしても、依然として非標準型のライフ・コースを取る傾向が強く、この層の女性のライフ・コースの多様化は修学期間の長期化による結婚年齢の変化だけでなく、大卒学歴のもたらす高い経済的自立性にも起因していると考えられる。第三に職業の影響については、「マニュアル」職と比べて、「専門・管理」職や「事務・販売」職に従事したことのある女性ほど、非標準型のライフ・コースを経る割合が高くなっていた。学歴と同じように、若いコーホートほど「専門・管理」職や「事務・販売」職での非標準型の割合が大きくなっていた。この結果は専門職や管理職のようなより賃金水準の高い職業に従事する女性ほど多様なライフ・コースを選択する傾向があることを示唆している。しかし、職業に従事した経験のある女性であっても出産や育児で退職を経験するとライフ・コースの多様化は抑制される傾向がみられた。それゆえ、多様なライフ・コースが選択できるかどうかは就業役割と家族役割の両立の程度にも影響されると言える。第四に、意識構造については、家族に関して伝統的な意識を持っていようが、非伝統的な意識を持っていようが、非標準型のライフ・コースを取る女性の割合は異なっていなかった。従って、価値意識とライフ・コースのパターンの間には明確な関連は存在しない。

上述した分析結果は女性のライフ・コースの多様化について、以下のような含意を持っている。すなわち、コーホート間比較で見られたように、進学率の上昇や家庭外就業の拡大を経験した1960年代以降出生コーホートでは、それ以前のコーホートとは異なり、多様なライフ・コースを選択する女性が増えてきている。しかし、こうしたライフ・コースの多様化はコーホート内部で等しく生じているのではない。大学卒の学歴を持っていたり、専門職や管理職に従事している女性ほど、多様なライフ・コースを選択する可能性が高い。また、出産や育児による退職を経験しない方が多様性は高い。こうした傾向は、個人の社会経済的属性や仕事と家族の両立度によって、ライフ・コースの選択性に差が存在することを意味している。換言するならば、多様なライフ・コースはすべての人が選択できるものではなく、一部の層にのみに可能なものである。そして、こうした傾向が今後とも続くとするならば、多様なライフ・コースを選択できる層とできない層とに二局化する可能性がありうる。従って、ライフ・コースの多様化の進展については、こうした点を考慮しつつ、注意深く研究を進めていく必要がある。

【参考文献】

- Abbott, Andrew, 1983, "Sequences of Social Events: Concepts and Methods for the Analysis of Order in Social Processes", *Historical Methods*, 16:129-147.
- Abbott, Andrew, 1995, "Sequence Analysis: New Methods for Old Ideas", *Annual Review of Sociology*, 21:93-113.
- Abbott, Andrew, 2000, "Reply to Levine and Wu", *Sociological Methods & Research*, 29:65-76.
- Abbott, Andrew, and Stanley DeViney, 1992, "The Welfare State as Transnational Event: Evidence from Sequences of Policy Adoption", *Social Science History*, 16:245-274.
- Abbott, Andrew, and Alexandra Hrycak, 1990, "Measuring Resemblance in Sequence Data: An Optimal Matching Analysis of Musicians' Careers", *The American Journal of Sociology*, 96:144-185.
- Abbott, Andrew, and Angela Tsay, 2000, "Sequence Analysis and Optimal Matching Methods in Sociology: Review and Prospect", *Sociological Methods & Research*, 29:3-33.

- Beck, Ulrich, 1986, *Risikogesellschaft: Auf dem Weg in eine andere Moderne*, Suhrkamp Verlag (東廉・伊藤美登里訳, 1998, 『危険社会』法政大学出版社) .
- Beck, Ulrich, and Elisabeth Beck-Gernsheim, 2002, *Individualization: Institutionalized Individualism and its Social and Political Consequences*, SAGE Publications.
- Beck, Ulrich, Anthony Giddens, and Scott Lash, 1994, *Reflexive Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order*, Polity Press.
- Blair-Loy, Mary, 1999, "Career Patterns of Executive Women in Finance: An Optimal Matching Analysis", *The American Journal of Sociology*, 104:1346-1397.
- Buchmann, Marlis, 1989, *The Script of Life in Modern Society*, University of Chicago Press.
- Giele, Janet Z, and Glen H Elder (eds.), 1998, *Methods of Life Course Research: Qualitative and Quantitative Approaches*, SAGE Publications.
- Halpin, Brendan, and Tak Wing Chan, 1998, "Class Careers as Sequences: An Optimal Matching Analysis of Work-Life Histories", *European Sociological Review*, 14:111-130.
- Han, Shin-Kap, and Phyllis Moen, 1999, "Clocking Out: Temporal Patterning of Retirement", *The American Journal of Sociology*, 105:191-236.
- 厚生労働省, 2003, 『労働統計年報』厚生労働省.
- 正岡寛司・藤見純子・嶋崎尚子, 1999, 「戦後日本におけるライフコースの持続と変化」目黒依子・渡辺秀樹(編), 『講座社会学2 家族』, 東京大学出版会, pp. 191-227.
- Mayer, Karl Ulrich, and Urs Schoepflin, 1989, "The State And The Life Course," *Annual Review of Sociology*, 15:187-209.
- 目黒依子, 1990, 『結婚・離婚・女の居場所』有斐閣.
- Modell, John, Frank Furstenberg, and Theodore Hershberg, 1976, "Social Change and Transition to Adulthood in Historical Perspective", *Journal of Family History*, 1:7-32.
- 文部科学省, 2005, 『文部科学統計要覧』大蔵省印刷局.
- NHK 放送文化研究所(編), 2005, 『現代日本人の意識構造(第6版)』日本放送出版協会.
- 野々山久也, 1989, 「いま家族に何が起きているのか」『家族社会学研究』1:6-14.
- 野々山久也, 1996, 「家族新時代への胎動」野々山久也・袖井孝子・篠崎正美(編)『いま家族に何が起きているのか』ミネルヴァ書房, pp. 285-305.
- 野々山久也, 1999, 「現代家族の変動過程と家族ライフスタイルの多様化」目黒依子・渡辺秀樹(編), 『講座社会学2 家族』, 東京大学出版会, pp. 153-190.
- Smelser, Neil J, and Sydney Halpern, 1978, "The Historical Triangulation of Family, Economy, and Education", John Demons and Sarane Spence Boocock (eds.), *Turning Points: Historical and Sociological Essays on the Family*, University of Chicago Press, pp. S288-S315.
- 総務省, 2003, 『労働力調査年報』総務省.
- Stovel, Katherine, and Marc Bolan, 2004, "Residential Trajectories: Using Optimal Alignment to Reveal the Structure of Residential Mobility", *Sociological Methods & Research*, 32:559-598.
- Stovel, Katherine, Michael Savage, and Peter Bearman, 1996, "Ascription into Achievement: Models of Career Systems at Lloyds Bank, 1890-1970", *The American Journal of Sociology*, 102:358-399.

- 渡邊勉, 2004, 「職歴パターンの分析：最適マッチング分析の可能性」『理論と方法』 19:213-234.
- Wu, Lawrence L, 2000, "Some Comments on "Sequence Analysis and Optimal Matching Methods in Sociology: Review and Prospect", *Sociological Methods & Research*, 29:41-64.